

美術を愛好する心を育てる美術教育のあり方

地域活性化アートイベントと

学校現場の連携を通して

〈概要〉

「美術は難しくてわからない」という大人や子どもは多い。その背景には、社会における働きや、多様な表現のよさに気付くことができていない実態があると推測した。地域を題材とした授業のあり方や、多様な表現への理解を促す手だてを考えるようになった筆者は、宇久島に赴任後、地域と連携した授業を作成していった。さらに地域活性化と美術振興を目的とした「宇久島アートフェスティバル」を企画・運営し、そのイベントを通して、子どもたちに社会と美術のつながりや、多様な美術表現のよさに気付かせようと考え、イベントと学校における美術教育とを様々な形で連携させた。

過疎化が問題となっている宇久島は美術館も無く、多様な美術作品に触れる機会もほとんど無い。鑑賞での言語表現に深まりがなかったり、写実性が高いか否かという価値観のみで判断したりする生徒が多く、表現にお

いても自己決定ができない姿が見られた。

そこで筆者は、児童生徒の作品を展示することでアートイベントへの興味関心を高め、夏休みの課題や授業において作品を鑑賞させた。さらに、児童生徒を対象としたワークショップを行い、体験によって幅広い美術表現の面白さを実感させた。これらの取組の結果、表現意図と工夫を関連付けながら感じたことを記述する生徒が増え、全ての生徒が多様な表現への興味関心を高めることができた。さらに、地域活性化の取組を提案する生徒が現れ、全校生徒で取り組む島のPR活動が毎年行われるようになった。

このアートイベントを「楽しい」と言う生徒の声からは、美術を「地域を活性化させ、楽しくさせるもの」として認識していることが伺える。地域活性化のアートイベントと学校現場の連携は、子どもたちに美術を愛好する心や、主体的に社会へ関わろうとする態度を育成するのに非常に有効な手段であると考える。



井手 淑子 (いで よしこ)

長崎県教育センター (研修員)

〈目次〉

はじめに

1. 宇久島アートフェスティバルとは

- (1) 地域の実態
- (2) 概要

2. 宇久島アートフェスティバルの展開

- (1) 2012年（準備として）
- (2) 宇久島アートフェスティバル2013
- (3) 宇久島アートフェスティバル2014
- (4) 宇久島アートフェスティバル2015
- (5) 成果
- (6) 課題

3. 宇久島アートフェスティバルと学校現場の連携

- (1) 生徒の実態（宇久中学校）
- (2) 作品展示
- (3) 作品鑑賞
 - ① 宇久島アートフェスティバル2013…夏休みの課題
 - ② 宇久島アートフェスティバル2014…授業での鑑賞
 - ③ 宇久島アートフェスティバル2015…夏休みの課題
- (4) 招待作家によるワークショップ
 - ① 2013【風を使って描こう】
 - ② 2014【等身大の自分を描こう】
 - ③ 2015【ペットボトルの花を咲かせよう】
- (5) 表現題材との連携
- (6) 成果と課題

4. まとめ

はじめに

次期学習指導要領で育成を目指す資質・能力の一つに「形や色彩などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と主体的に関わる態度」があげられている。この育成には、社会における美術の働きを生徒に実感させ、美術を学ぶ価値を感じ取らせることが大切であると考ええる。地域と連携した授業は、その有効な手段の一つだと考えられる。

以前から筆者は、「美術は難しくてわからない」という声を聞くことが度々あった。そのような大人や子どもとの交流を通して、社会的に美術が特別視され敬遠されがちであることを感じ、問題だと捉えるようになった。そしてこれは、多くの人が社会における美術の働きに気付かなかつたり、多様な表現のよさを理解できなかつたりすることが原因なのではないかと推測した。そこで、地域を題材とした授業のあり方や、多様な美術への理解を促す手だてを考えるようになった。2012年、宇久島に赴任した筆者は、観光協会などと連携し、地域を題材にした授業を多数作成した。さらに、地域活性化のためのアトイイベント「宇久島アートフェスティバル」を企画・運営し、美術を通じた地域活性化に4年間取り組んだ。そして、そのイベントを通して、社会における美術の働きや多様な美術表現のよさに気付かせたいと考え、イベントと授業を様々な形で連携させた。

本論文では、この「宇久島アートフェスティバル」の実践及び「宇久島アートフェスティバルと美術教育の連携」についての実践の報告を通して、地域活性化のためのアトイイベントと教育の連携の可能性について述べていきたい。

1. 宇久島アートフェスティバルとは

(1) 地域の実態

宇久島は、長崎県五島列島最北端に位置する自然の美しい島である。しかし、他の離島と比べるとその知名度は低く、最盛期には15,000人だった人口も、今では2,000人ほどであり、急激な過疎化が問題となっている。児童生徒数も激減しており、小中高の全児童生徒数は2017年3月現在96名である。

子どもたちは島に愛着をもっており、毎年行事で行う海岸清掃では熱心にゴミ拾いをしたり、郷土愛をテーマに作文を書いたりする姿が見られた。しかし、そのような思いはあっても、地域活性化のために自らすすんで何かしようと考える子どもはいなかった。危機感をもつ島民も少なく、地域活性化への取組はあまり活発とは言えなかった。また、島には美術館が無く、多様な美術作品に触れる機会がほとんどない環境であった。

(2) 概要

地域の実態を知った筆者は、地域活性化と島内の美術振興を目的としたイベント「宇久島アートフェスティバル」を企画した。作品展示を行う県内外の作家が、作品を通して交流することで、刺激し合い高め合うことも目

指し、次のような内容で構成した。

- ① アーティスト・イン・レジデンス
(招待作家のみ)
- ② 招待作家によるワークショップ
- ③ オープニングパーティー
(島民と作家の交流会)
- ④ 作品展示(小品展と本展)

アーティスト・イン・レジデンスとは、作家を現地に招待し、滞在をしながら制作を行わせることを言う。作家は、その土地の風土や住民と触れ合いながら、新しいインスピレーションを得て制作することとなる。島民を中心とした鑑賞者が、そうしてできた作品を見ることで、作家というフィルターを通して宇久島を捉えなおし、島の魅力を見出すよい機会になると考えた。予算などの都合で長期滞在は招待作家のみとなったが、県内作家も2日以上滞る制作を進んで行った。また、毎回必ず島民からも出品を募り、数名の参加を得た。招待作家のワークショップは、児童生徒を対象にしたものをイベント前に行った。作品展示については、まずイベントの宣伝として島内で行う本展の数ヶ月前に、佐世保市や長崎市で小品展を行った。本展は島内に点在する10軒ほどの空き家を展示場所にし、町を歩きながら作品を見ていく展示会にした。

2. 宇久島アートフェスティバルの展開

(1) 2012年(準備として)

赴任した2012年は、事務局としての準備期間とした。まず行ったことは、島民を中心とした実行委員会の立ち上げである。実行委員長を島民に依頼し、その方を中心に他の島民と積極的に関わり、人間関係を広げていった。実行委員長には空き家使用の交渉を任せ、筆者は助成金を得るための書類作成や参加作家の募集、招待作家の依頼などに奔走した。さらに、イベントのあり方を学ぶため、新潟県の大地的芸術祭に視察に行き、アートイベントのイメージを固めていった。

(2) 宇久島アートフェスティバル 2013

テーマ	「つながる」島内外の人々がつながってほしいという思いを込めた。
開催日時	小品展：6月19～24日(佐世保市) 本展：8月18～27日(宇久島)
参加作家	招待作家1名、県内作家17名 (うち宇久島在住4名)
助成金	佐世保市合併地域まちづくり特別事業 「地域活性化イベント支援事業」

第1回目のアートフェスティバルは、国際的に活躍しているウエダリクオ氏（大阪市在住）を招待作家として招いた。宇久島からも水彩や陶芸が趣味の島民や、写真が得意な教員が出品した。自らも、他の参加者と同じく空き家の一角に作品を展示することで、日常的な空間に作品を置くことの難しさを身をもって知ることができた。また、ウエダ氏との交流も大きな刺激となった。

ウエダ氏は、「制作中に島民と交流したことや島の文化に触れたことが素晴らしい」と語っている。ウエダ氏の公開制作（図1）は、お盆の時期に墓地近くの捕鯨資料館前で行われたため、多くの島民が制作風景を目にすることになった。作品のコンセプトは「すべてはつながっている」というもので、作品の一つに昨年他界した母へ捧ぐというテーマがあったことから、墓参りをする島民の共感を呼び、興味を持つ者が徐々に増えた。協力した島民からは、「現代美術は難しいと感じていたが、このような表現方法もあると知って面白いと感じた」「作品の説明を聞けてよかった」などの感想を得ることができた。



〈図1〉ウエダ氏の作品

残念なことに、台風が2週連続県内を襲い、県内作家の搬入日が延期となってしまったため、惜しくも県内作家と招待作家の交流はほとんどできなかつた。また、期間を急ぎよ延期したことで、各所への連絡を早急に行わなければならず、運営面では反省点が多く残ることとなった。しかし、出品作家が素晴らしい展示をしてくれたおかげで、イベントとしては成功させることができた。招待作家にはデンマーク在住のステイン・ラスムッセン氏を招いた。ラスムッセン氏は、国際的に活躍している現代美術作家で、キュレーターとしてワークショップイベントを多数行い、地域活性化や美術振興に努めている。制作は流木を炭にすることから始まり、島民の協力を得ながら行われた。「Island」という宇久島を昼夜で様相を変える姿に多くの鑑賞者が感動

の可能性を感じる」などの感想を聞くことができた。特にウエダ氏は「このようなイベントが受け入れられるのは本来難しいこと。しかし島民が非常に協力的で感激した」と語っている。これは、協力した島民の人柄の良さはもちろんだが、筆者と島民が島おこしへの思いを共有でき、その思いを基に信頼関係を築くことができていたということなのではないだろうか。来場者数は多くはなかつたが、参加者それぞれの心に小さな火を灯すことができたイベントだったと感じている。

③ 宇久島アートフェスティバル
2014

テーマ	「ひろがる」 昨年つながった絆をさらに広げよう
開催日時	小品展：6月18～23日（佐世保市） 本展：10月12～26日（宇久島）
参加作家	招待作家1名、県内作家20名 （うち宇久島在住8名）
助成金	（公財）松園尚口記念財団 地域振興助成事業

していた。(図2) ラスムッセン氏は、数名の県内作家としか交流することはできなかったが、「宇久島はとても良いところで、良い経験ができた」と語っている。ワークショップでは、中学生や職員と交流し、公開制作では数名の島民と濃密な時間を過ごした。

ウエダ氏やラスムッセン氏の制作に対する考へに感銘を受けた筆者は、自分がこれまで使用してきた素材である鉄に宇久の海水を加え、作品の変化の過程も見せる表現に挑戦した。また、ラスムッセン氏との交流の中で、氏が手がけるワークショップイベントにおける工夫と苦勞を知ることができた。それは、ワークショップの理解を得るための、十数回に及ぶ説明会である。これは、本イベントに足りない視点であり、次回に生かすこととした。

(4) 宇久島アートフェスティバル 2015

テーマ	「ふかまる」2013年でつながら、2014年で広がった「島を中心とした絆」をさらに深めたいこと
開催日時	小品展：6月19～23日(長崎市) 本展：7月20～8月2日 (宇久島)
参加作家	招待作家1名、 他21名(うち宇久島在住3名、 沖縄県1名)
助成金	(公財) 日本離島センター 離島人材育成基金助成事業 (公財) 松園尚巳記念財団 地域振興助成事業

実行委員とボランティアの増加や青年団主催の祭りとの連携、スタンプリー、ワークショップにおける小学校・中学校・大学の連携など、新たな取組を多数行った。その中でも特筆すべきは島民向けの説明会である。ラスムッセン氏の実践を参考にし、アートイベントの意義と美術作品の見方をスライドで説明した後、KJ法を用いて地域活性化についてのグループ討議を行った。島民からは「とても分かりやすかった」「もっと早くしてほしかった」などの声があり、大変好評だった。また、この会の参加者が友人に美術の見方を説明しながら会場を回る姿も見られ、説

明会の有効性を感じることができた。今回の招待作家には、大阪を中心に国内外で活躍している佐野祥久氏を招待した。まず直面した問題は、佐野氏の制作の素材である大量のペットボトル収集であった。そこで、学校や広報誌で呼び掛け収集に奔走した結果、多くの島民の協力を得て千本以上のペットボトルを回収できた。多くの島民にも周知でき、結果的によい宣伝となった。佐野氏は身近なペットボトルを幻想的な作品に変え、多くの鑑賞者を驚かせていた。

全体として、2014と比べると空き家の特性をさらに生かした表現となっており、作家たちからも「表現の質の高まりが感じられる」と互いの変容を述べ合う姿が見られ、「宇久島で制作や展示をする意義は大きい」という声もあった。

筆者は今回、前年度の制作を生かし、同じく宇久の海水を使って錆でドロイングを施した。これまでの2年間で学んだ作品の見せ方の工夫を生かすことができた。招待作家とワークショップの運営や展示を通して関わることができたことは、自分にとって大きな収穫であった。



〈図2〉 ラスムッセン氏の作品



〈図3〉 佐野氏の作品

(5) 成果

次に示す(表1)は、3回のイベントの来場者数を示している。

年度	来場者数(のべ数)
2013	3255名(9会場) うち島外38名
2014	1024名(9会場) うち島外240名
2015	1446名(10会場) うち島外531名

〈表1〉

回を重ねるごとに来場者が増加した。また、毎年新聞各社から度々取材を受け、インターネットの記事にも掲載された。さらに、「地球の歩き方 五島列島」や佐世保市の広報誌にも大きく掲載された。また、2015は開催後に佐世保市の文化事業の一つである「させば文化マンス」に招待され、宇久島で展示した作品を佐世保市の文化施設に再展示した。宇久島での展示やワークショップの様子を写真で紹介し、多くの市民に宇久島や本イベントをアピールすることができた。これらことから、本イベントは宇久島の知名度向上に貢献することができたと考える。さらに、島民に対して地域活性化についての意識付けができたことも成果の一つである。2015の説明会の参加者の一部がゆるキャラやそのグッズを作成したり、本イベントのボランティアが中心になって音楽フェスを開催した

りと、新しい地域活性化の動きが現れた。

美術振興という点では、第一に、子どもを含めた島民の現代美術に対する興味関心を高めることができたと考えられる。第二に、県内の美術振興の一端を担うイベントとして、一定の成果をあげたと考える。回を重ねるごとに参加作家の制作もより見えたえのある作品となり、作家が互いに刺激を受け高め合ったことが伺えた。また、前述した「文化マンス」での展示は好評を博し、展示施設の責任者からは「アンケートを見ると、かなり感激された方がいた」との報告を受けることができた。

(6) 課題

本イベントに関心を持つ島民が徐々に増えたとは言え、説明会や展示会場へ足を運ぶ島民はまだ限られている状況が見られた。多くの島民(大人)にとって、現代美術に対するハードルの高さや、新しいことへの抵抗感は強いことが伺えた。説明会を早くから何度も行うことや、美術にこだわらず、より多くの島民を巻き込めるような活動の導入などを考え、工夫していく必要があると考えられる。

3. 宇久島アートフェスティバルと
学校現場の連携

(1) 生徒の実態(宇久中学校)

宇久島には当時、小学校2校(2016年

度に統合)、中学校1校、高校1校があった。

小中高一貫教育を行っており、筆者は中学校に籍を置きながら高校でも毎週指導をし、小学校では出前授業を行っていた。中学校の生徒は33名と少なく、幼少期から互いを知っているため言葉交わさずとも通じるところがあり、自己表現に課題があった。美術においては、鑑賞での言語表現に深まりが見られない生徒や、写実性が高いか否かという価値観で作品を評価する生徒が多かった。そのため表現においても「絵を描くのが苦手」と言う生徒が多く、真面目な生徒ほど「どうしたらいいですか？」と質問し、自己決定できないという実態があった。そこで、多様な美術表現のよさに気付かせ、生徒の価値観を広げさせることを目標に、アートフェスティバルと授業を連携させて作品展示や作品鑑賞、ワークショップなどを行うこととした。

(2) 作品展示

まずは、参加させることでアートフェスティバルへの関心をもたせようと考え、全児童生徒の作品を空き家に展示することとし、各校に協力を依頼した。高校生は授業のある1年生のみの参加となったが、毎年ポスターの制作をさせ、完成したポスターは島内各地や佐世保市各所に掲示することができた。小中学校では時間の確保が難しかったため、授業や夏休みに制作した作品とワークショップで制作した作品を展示することとした。

この取組における収穫は、保護者がイベントに興味をもったことである。子どもたちと一緒に鑑賞して回る姿が多く見られた。また、生徒にとっても、普段見ることのできない異校種の作品を鑑賞することはよい刺激となったようである。

(3) 作品鑑賞

イベントに関心をもたせるだけでなく、鑑賞させなくては多様な表現に触れさせることができない。そこで、生徒全員に作品鑑賞を行わせるために、夏休みの宿題として鑑賞レポートを課し、2014年には授業の中で鑑賞を行った。

① 宇久島アートフェスティバル2013

夏休みの課題

夏休み期間中の開催だったため、中学校では、美術科の夏休みの宿題の一つとして、本イベントを見て回り印象に残った作品について記述する鑑賞レポートを全学年に課した。宿題という形ではあったが、楽しみながら見て回る生徒が多く見られた。また、意外にも多様な表現のよさに気づき、色や形から感じたものを記述している生徒が42%もいた。そのうち、作品の技巧性の評価ではなく、色や形から作者の意図や思いについて記述できた生徒は全体の15%であった。次に示すのはその一例（一部抜粋）である。

「日本の国旗を使っていたから平和を願う

気持ちが入められていたのかなあと思った。(K)」「亡くなったお母さんにハガキの作品を送るというのがびっくりしました。でも、それだけお母さんのことを思ってたらしやるんだと思いました。風で作品をつくっていくというのがそもそもすごいと思いました。風だったら自然な線だからどこに引かれるかわからないからいいなと思いました。(T)」

実際に作者と話ができたTの感想からは、風を使うことによる偶然性の面白さに気付いていることや、作品のテーマに感動していることが伺える。

一方で、児童生徒作品や工芸、写真などの具象作品に対して感想を記述した生徒が約57%であり、そのうちのほとんどが技巧についての記述であったことから、多様な表現のよさに気付いていない生徒や、苦手意識を持つ生徒が多いことが推察された。このことから、鑑賞をさせる際には、鑑賞の視点をきちんと示すことが重要だと気付いた。

② 宇久島アートフェスティバル2014

授業での鑑賞

2014のイベントは10月の学期途中に開催した。前回の反省を踏まえ、中学校の各学年の授業において作品鑑賞を行った。学校に隣接する空き家に展示している7点の作品を鑑賞させた。作品は「色、形、素材」などが表現意図に沿って工夫されているということを確認し、まず全員で招待作家の作品を鑑賞した。生徒とやり取りをしながら、表現意図

と表し方の工夫についての気づきを引き出していった。このやり取りをもとにして鑑賞の視点に気付かせ、県内作家の作品(6作品)も同様に全員で鑑賞し、その後自由に見て回らせた。問い掛けることによって、生徒は作品をよく観察しようとしていた。(図4) 鑑賞後の記述には次のようなものがあつた。

「ステインさんの作品はとても幻想的だった。島の形みたいに見えたので、宇久島を表していると思った」「どうしてこんな風に表現しているのか分からなかった。でも、



〈図4〉 授業での鑑賞の様子

佳作賞

考えることが大事だと思うので、考え続けていこうと思う」

これらの感想から、生徒が表現意図について主体的に考えていたことが分かった。また、体験型の作品を積極的に友達と鑑賞する姿や、作品のアイデアに感動し、鑑賞を楽しむ姿も多く見られた。全体を見て回った際の鑑賞レポートは課さなかったため前年度との明確な比較はできないが、多様な表現へのハードルは前年度よりも低くなり、生徒は作品の技巧についてよりも、表現意図を考えながら鑑賞していた。

③ 宇久島アートフェスティバル2015

夏休みの課題

夏休み期間中だったため、鑑賞レポートという課題での鑑賞とした。前年度の取組を踏まえ、夏休みに入る前に、美術作品の鑑賞の視点について確認する時間を設けた。今回の鑑賞ワークシートには、自分の好きな作品ベスト3について記述する欄を設けた。2013では具象表現に対する記述が6割近くを占めていたが、今回は1%にとどまり、全員が多様な表現について感じたよさを述べていた。次に示すのは、生徒の感想の一部である。

「美術について興味があった。もっと他の作品も見たい」最初は軽い気持ちで見に行ったけど、次から次に見ていくうちにどんどん楽しくなり、おもしろかったです」「現代美術ってすごいなと思いました。一つ一つの作

品に心がこもっていて、アートっていいなと思いました。来年のアートフェスティバルが楽しみです」

全ての生徒の感想から、彼らが多様な美術表現のよさに気付き、興味・関心を高めたことが伺えた。さらに、表現意図と表し方の工夫を関連付けて考え、記述できている生徒が75%であったことは、2013からの大きな向上と言える。また、「見方が違うことで見えてくるものが違った」「友だちと見て回ってみて、自分と違う見方をしていたので、そこが面白かったです」などの感想もあり、生徒が見方・感じ方を広げている様子も伺えた。さらには、「アートフェスティバルでたくさんのことを考えることが出来るので、とても良い機会だと思います」という感想から、生徒がたんに表面的な表現の面白さを感じているだけでなく、表現を通して思考を巡らせていることが分かった。

(4) 招待作家によるワークショップ

① 2013 「風を使って描こう」(図5)

講師 … ウエダリクオ 場所… 宇久中学校
参加者… 宇久小・中児童生徒、職員計30名

夏休み中のため全校生徒の参加は難しかったが、宇久中職員の協力で9割の生徒が参加した。内容は、ウエダ氏が行う風のドローイングの簡易版を樹木の枝や葉を使って行うと



〈図5〉2013ワークショップの様子

② 2014 「等身大の自分を描こう」(図6)

講師 … スティーン・ラスムッセン
場所 … 宇久中学校
参加者… 宇久中生徒33名、保護者2名、職員

2時間の全校美術という形で実施した。今回、ALTと英語科教諭に通訳を依頼し、会場準備は職員全員の協力を得た。ワークショップの内容は、目を閉じて、両手に持った筆を同時に動かしながら等身大の自分を描くというものである。最初は目を閉じて描くという活動に戸惑う生徒が多かったが、次第



〈図6〉2014ワークショップの様子



〈図7〉2015ワークショップの様子



〈図8〉ワークショップ作品の展示

に全員が無言で没頭していった。特に、普段は口数の少ない3年生の男子が、全身の感覚を研ぎすませながらのびのびと大胆に描く姿には驚かされた。この活動が「上手・下手」の価値観では測れないものであること、全身を使って描く動作性の高さから、多くの生徒が開放感を感じながら自由に描くことができたのではないかと推測する。生徒の姿に触発された教師数名が飛び入り参加する場面もあった。出来上がった作品は3か所の空き家に分けて展示した。

③2015「ペットボトルの花を咲かせよう」

(図7)

講師 … 佐野祥久 場所… 宇久小学校

参加者… 神浦小・宇久小・宇久中全児童生

徒計86名、職員32名、大学生10名、

ボランティア4名、県内作家1名、
総勢133名

2回のイベントを経てワークショップの有効性を感じた筆者は、この活動を広げようと考えた。そこで2校の小学校に協力を依頼し、小中合同のワークショップを行うこととした。さらに、前年度から授業で連携していた長崎大学教育学部美術科の学生の参加が実現し、ここに小中大の教育連携を生み出すことができた。講師は招待作家の佐野祥久氏に依頼し、大学生をアシスタントとした。児童生徒は10班に分け、小学校の低学年と高学年、中学生が同人数ずつ各班に入るようにし、大学生を各班のサポーターとして1名ずつ配置した。異学年で一緒に制作したことで、それぞれとても楽しい時間を過ごせたようであ

る。

ワークショップの内容は、ペットボトルで花をつくるというものである。ペットボトルに切り込みを入れて花びらをつくり、マーカーで着色する。2時間という限られた中で完成させるため、事前にボランティアと実行委員でペットボトルの底を切る作業を行った。作品は、宇久町行政センターのロビーに佐野氏が展示し、(図8)その鮮やかな姿は島民から大変好評を得た。生徒の鑑賞レポートもこの展示についての記述が多く、「自分たちでこんな幻想的なものをつくり感動した」「きれいでびっくりした。個性が

集まると魅力を感じる作品になった」などの感想があった。多くの生徒が、自分たちがつくった作品に愛着を持ち、またそれが一斉に展示されて美しく変化したことに感動していた。また、「させほ文化マンス」では、ホール外に展示され、多くの佐世保市民の目に触れることとなった。

(5) 表現題材との連携

2015では、2年生の表現の題材において、本イベントと関連させた「lets 宇久島アート！」という立体造形の授業を行った。「宇久島」から連想させてそれぞれの主題を持たせ、作家と同じように空き家に展示することを想定して制作させた。生徒たちは、それぞれ主題を基に材料を選択し、生き生きと

作品づくりを行った。アートフェスティバルで鑑賞した体験的な作品からヒントを得て、釣りを疑似体験させる作品を制作する生徒もいた。

(6) 成果と課題

まず大きな成果としては、(2)で述べた鑑賞レポートから、全ての生徒の多様な表現への興味関心を高めることができたことが挙げられる。また、鑑賞の記述についても、表現意図と工夫を関連付けて記述した生徒が2015には75%もあり、言葉は少し足りないものの、内容に深まりが見られた。さらには、普段の授業で自己決定ができず「どうしたらいいですか?」と質問していた生徒は、「こうしたいから、どうしたらいいか」というように自分の表現意図を基に質問するようになった。これは、生徒がワークショップや展示作品鑑賞で様々な表現に触れたことで、美術表現に対する視野を広げることができたことの現れではないかと考える。

第二の成果としては、地域活性化への意識の変容が挙げられる。2015年、宇久中生徒総会において、「宇久島PR」をしようという声があがったのである。これまでで最も活発な議論が交わされ、多様な案の中からPR冊子を作成することとなった。このPR活動は、取組内容を毎年変えながら、全校生徒で取り組む活動の一つとして現在も続いている。

課題は、鑑賞の記述を深めさせるための手だてが十分とはいえなかったことである。夏休みの宿題として鑑賞レポートを課す前に、授業の中で多様な表現をたくさん鑑賞させておくことや、生徒が鑑賞の視点に気付くことができるようにワークシートを工夫するなどの手だてが考えられる。

4. まとめ

本実践を通して、筆者は多くのことを学んだ。まず一つは、多くの人と積極的に関わることの大切さである。豊かな人間関係づくりにおいて大切なことを、多くの交流を通して学ぶことができた。また、たくさんの島民と協力してイベントを運営できた経験は、学校現場における同僚や保護者との関係づくりに大いに生きると考える。

二つ目は、大学生や作家など外部との連携のあり方である。今回の直接的な大学生との関わりは、限られた人間関係の中にいる生徒にとつて大きな刺激であり、大学生にとつても学びの多いものとなった。また、作家との関わりを通して生徒は、親近感を持って作品を鑑賞することができていた。これは、美術作品をより身近に感じることでできる手だてとして有効だと考える。今後、ゲストティーチャーとして招くなど、様々な方法での連携が考えられる。

三つ目は、「地域を愛することは子どもを愛することと同義だ」と気付いたことである。筆

者は、アートイベントの運営を地域の応援として行っていたつもりだった。しかし、それは子どもたちの島を愛する気持ちに寄り添うことであり、子どもたちの応援をすることもあった。それに気付いたのは、生徒から宇久島PRをしたいという提案が出た時である。

そして四つ目の学びは、地域活性化のアーティイベントは、子どもたちが社会における美術の役割を理解するのに有効だということである。次に示すのは、筆者が島を離れる際に生徒からもらった手紙の一部である。

「ペットボトルから花をつくるイベントもとても楽しかったです。井手先生が宇久に来てから、本当に楽しいイベントが増え宇久が活性化されました。私は宇久のことが大好きなので、もっともっと活性化させたいです。先生とみんなで完成させた宇久島PRパンフレットも、日本中の人が見られるようになっていいなと思いました」

この言葉には、社会へ主体的に関わろうとする意欲や、島への愛情が感じられる。そして何より、既に美術が地域活性化の手段という、社会の役割を持った存在として認識されていることが伺える。美術を高尚なものとして特別視したり敬遠したりせず、純粹に「楽しい」と感じているこの生徒は、きっとこれからも美術を「社会の中で、みんなを楽しくさせるもの」と捉えるだろう。

これからも、子どもに寄り添い地域を愛しながら、美術教育を通して主体的に地域と関わる生徒を育てていきたい。